

特別展

フランスの肖像

ルノワール、ピカソ、マン・レイからバルテュスまで

1994年8月3日水—9月18日日

渋谷区立松濤美術館

開館時間＝午前9時—午後5時（入館は4時30分まで）

休館日＝8月8日（月）、14日（日）、15日（月）、22日（月）、29日（月）
9月5日（月）、11日（日）、12日（月）、16日（金）

入館料＝一般200（160）円、小中学生100（80）円
（ ）内は20名以上の団体料金



フランスの肖像

ルノワール、ピカソ、マン・レイからバルテュスまで

ひとの姿を写し取り、その姿をとどめたい、残したいという欲求は、いつの頃から人間に備わっていたのでしょうか。人の肉体が時とともに変わり、いつか消滅しても、それを写し取った像は残ります。つくられた像は、ひとの姿をとどめることでモニュメントになり、表し方によってなんらかのシンボルとなることもできます。肖像はひとの心の欲求から生まれ、社会のなかで機能してきました。だから今も残されている、歴史上の権力者や特権者たちの肖像から、わたしたちは様々なものを読み取り得るのです。

肖像は、彫像や絵画で表されてきましたが、19世紀に写真が発明され、やがて広まるようになると、新参の写真がその役割を徐々にこなすようになりました。写真がさらに身近なものになると、限られた人だけが肖像のモデルだったこれまでの時代が終わり、誰もが自分の姿を複数の像として残せるようになりました。その時、肖像画や肖像彫刻は、今までの役割から放たれ、大きく変化することになります。それは絵画と彫刻が「写す」ことから自由になり、画家や彫刻家のイメージにしたがって様々なスタイルを生み出していく、美術の変革そのものと重なり合う、転換期だったのです。

本展は19世紀後半の変革期以降のフランスに的をしぼって、肖像画・肖像彫刻の多様な展開を紹介するものです。

劇的な美術変革の主要な舞台となったフランスから、とくに選んだ油彩画、版画、彫刻、インスタレーションによって、より自由に、多彩になっていく肖像表現の冒険を楽しんでいただきます。日本初公開の仏現代美術最新の動向を含む約110点を展覧いたします。



アンクル「オルレアン公の肖像」1843年
(イアサント・リゴア美術館)



ルノワール「自画像」1910年
(個人蔵、パリ)



ピカソ「フェルナンドの肖像」1907年
(シュティフツング・ルートヴィック近代美術館)

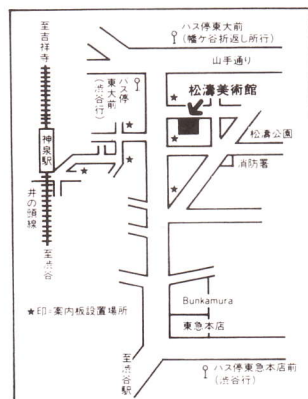


マン・レイ「自画像」1916-70年
(マリオン・メイヤー画廊)

講演会：
8月7日(日) 午後2時から
「肖像画とその解体」
講師：中山公男(美術評論家)

映画会：
8月20日(土) 午後2時から
「世界・美の旅 ルノワール/モネ」
9月10日(土) 午後2時から
「世界・美の旅 ピカソ/セザンヌ」

美術相談：
8月13日(土) 午後2時-4時
講師：宮田翁輔(洋画家)
佐藤善勇(洋画家)
9月3日(土) 午後2時-4時
講師：岩田齊(絵本研究家)
松島靖(水彩画家)



東京都渋谷区松涛2-14-14 tel/03.3465.9421
渋谷駅下車徒歩15分/神泉駅下車徒歩5分

表：
バルテュス「若い衣装を着たイレーヌ夫人の肖像」1935年
(ゲオルク・ヴェヒター財団)